

九州稲作の生産性に関する考察

～佐賀・鹿児島県を対象として～

坂 梨 鷹 元

(九州農業試験場)

SAKANASHI, T.

A Study on the Productivity of Rice Raising in Kyushu District

— esp. in Saga and Kagoshima Prefectures. —

前報では主として全国平均並びに東北に対する九州稲作の位置づけについて考察したが、本報告では更に九州内部における稲作生産性の地域性・階層性について南九州は鹿児島県・北九州は佐賀県を代表事例として年次別に比較検討したものである。考察結果の概要は以下の通りである。

現段階：先づ、両県稲作について土地・労働・物財資本（費用合計—自家労働費）等の各単位当り生産量をみれば、10a 当り収量は佐賀が鹿児島より約140 kg・九州平均よりは約74kg多い。投下労働1時間当りでも佐賀は鹿児島より約1,500 g・九州平均よりは約800 g・物財費1,000円当りにおいても同様にそれぞれ多く、150 kg当り生産費は相対的に安く、家族労働報酬等は著しく優位にある。佐賀稲作は鹿児島稲作に比して投下労働が少ない反面、物財費用を多く投入し高い収量を上げているが、これは主として機械と労働の代替関係の結果である。

つぎに、階層別にみれば概して上位層ほど収量は漸増し、投下労働及び物財費用は顕著に減少している。即ち、(1) 収量は鹿児島は1.0ha以下の階層が300kg台で、1.0—1.5haの階層において漸く419 kgに達している。佐賀は概ね500 kg以上の高水準で階層差は大きい。(2) 10a 当り投下労働時間の階層差は鹿児島の方が相対的に大きい。階層別に両県を比較すると50a 未満層では佐賀と可成りの差があるが上位層ではこの差は漸減している。(3) 物財費では鹿児島は30a 以上の階層において佐賀及び九州平均に比べて少ない。(4) この物財費の差異を0.3—0.5 ha階層と0.5—1.0 ha階層についてそれぞれ費目別に比較すれば両階層とも肥料費・農具費・畜力費及び労働費等で両県間に著しい差異がみられる(表参照)。

鹿児島は0.5—1.0haの階層では畜力費が佐賀より1,683円多い反面、農具費が1,608円少なく、両

費目は相殺される関係にある。階層別にみれば下位層で畜力費の負担が大きく、これが労働の多投化要因とみなされるが鹿児島の場合労賃単価及び自家労賃見積単価が低いため投下労働時間が多いが労働費は逆に安くなっている。その他肥料費、防除費等の諸材料の使用量も少ない点は注目される。

10a 当り生産費々目の比較(昭38～40年平均)

階 層	(鹿児島) — (佐賀)	
	30～50アール	50～100アール
肥 料 費	-718円	-695円
防 除 費	-229	-363
建 物 費	-210	-258
農 具 費	-700	-1,608
労 働 費	-832	-2,699
諸材料・水利費	-159	-399
畜 力 費	1,581	1,683
賃 料 々 金	114	105
そ の 他	39	53
差 引	-1,144	-4,120

農林省 米生産費調査資料による。

年次動向：昭和36～38年度との対比で、(1) 収量で両県の差が増大しつつあること。(2) 労働時間は両県とも減少傾向を辿るが特に佐賀の上位層の減少が大きいこと。(3) 物財費は全般的に増大するが鹿児島の上昇率は鈍い。(4) 上記(1)(2)の差異が物財費の差を補って佐賀の優位性の根拠となっている。

要約：佐賀稲作の高位生産性は、(1) 10a 当り収量が高いこと。(2) 物財費は大きいですがそれ以上に投下労働時間が節約されていることに起因する。つまり、佐賀においては農業機械の労働力に対する代替関係がより強く現われているのに対して鹿児島はその関係が弱い。この相違は基本的には立地条件、特に土壌、気象条件の相違、又経営規模、経営方式、地価、労賃水準等の違いとの関連で理解しなければならない。(九州農試研究資料第38号(1968・8)参照)。